

家族の再生の道を探って

伊集院理子

幼稚園の現場にいと、色々な親子に出会う。教育熱心なあまり、自分の思うままに子どもを動かそうとして、知らず知らずの間に子どもを生きづらくしている親。動きの激しい子どもに振りまわされていて、少しでも子どもを型におさめようと規制し、子どものその時の気持とはすれちがう関わりを重ねてしまう親。いかなる場合も親の強

権を発動してはいけないという信念を持っているのか、ヘビの生殺しのように冷静に執拗に説得し子どもを納得させようとする親。何だか気持ちがいまぐらく重なりあわないで、自然のままではいられずにお互いにどこか無理をしている親子を見るにつけ、子どもとちょうど良い距離を保って良い関係を結んでいくことが、今とてもむずかしくなっ

ていると思われる。

そんな思いをいだけながら書店に足を運ぶと、「アダルト・チルドレン」関係の本のコーナーができていて、十冊以上もの本が取り揃えられていた。私がアメリカのアルコール依存症の治療の現場のなかから生まれたという「アダルト・チルドレン」という言葉に最初に出会ったのは、四年前、幼稚園教育者の研修会の際の講演の中であった。目新しいその言葉から、アメリカでは、アルコール依存症の家族、さらにそれから拡がって機能不全家族の中で育った子どもたちが親から有形無形に侵入されながら、がまん強く「いい子」をふるまっていることが問題になっているという認識を新たにした。それが、ここ一、二年の間に、日本でもたて続けに「アダルト・チルドレン」関係の本が出版されて、本屋で平積みにされるまでに脚光をあびていることに驚きを感じえなかつ

た。

その中で『コントロール・ドラマ』それは「アダルト・チルドレン」を解くカギ』（信田さよ子著、三五館）という本が目についた。前述したように、現場で親の有言無言のコントロールの中で生きづらくなっている子どもたちが気になっていた所であったし、我が家でも、親の権威で子どもをコントロールすることは出来るだけ避けたいと思いつつも暗黙のコントロールに陥っているのではないかという危惧をいだいていたからである。

著者はこの本の中で、アダルト・チルドレンを切り口にして、今の社会を支える中年世代、若者の親たちの世代がつくってきた家族、その中で展開してきた支配・被支配のドラマを暴き出している。暴力や抑圧といった明快な支配ではなく、むしろ美徳とされてきた愛情という名のもとに、真

ことしか「家族の再生」はないということだろう。センセーショナルな言葉に振りまわされるのではない、著者の前向きでピュアなアピールがこの本の中にはある。

私は、この本を読みながら、少し前に読んだ二冊の本のことを思いだした。

一冊は、スザンナ・タマローというイタリアの女性作家の小説『心のおもむくままに』（草思社）である。この小説は、八〇歳の人生も残り少ないと悟った老女が、遠く離れた孫娘に対して、遺書になるかもしれないと思いながら、これまで誰にも明かさなってきた自分のこと、自分の娘のこと（つまり孫娘の母のこと）、そして孫娘のこのことを日記の中につづるという形式で書かれている。祖母、母、娘と三世代に渡る女たちの心の奥底の歴史が淡々とつづられている。

——別の人物になりすますために自分らしさを捨てるのは、自然にできることだとは思わないでほしい。別のわたしは、愛されたいから他人の要求に合わせようとしたが、わたしのなかのなかがそれを拒みつづけ、自分自身でありつづけようとした。——

——あるひとつのパターンを押しつけるという、わたしが子供のころにされたことをおまえの母親にはすまいと、彼女にはいつでも好きに選ばせていた。あらゆる行動が容認されていると感じてほしかったから、わたしがしたのは、「わたしたちは別のふたりの人間なのだから、おたがいのちがいを尊重しなくてはね」とおりにふれて言うことだけだった。——

——もしほんとうにイタリア（娘の名）を愛していたのなら、腹をたてて厳しくあたるべきだったのだ。（略）頑として言うべきだった。彼女がわ

たしに切実に臨んでいたのは、まさにそれだったのではあるまいか。――

――愛のいちばんの特質は強さであると知っていたら、ことはもっと別な形で展開しただろう。しかし強くあるには自分自身を愛さなければならず、自分を愛するには自身を深いところまで知り、奥底にかくれている受け入れがたいことをふくめて、自分のすべてを知る必要がある。――

――自分自身への理解は、自分を受け入れようとする心から生まれるのだよ。――

などなど、一つひとつの言葉が人間への深い洞察に満ちていて、自分の事、家族の事を深く考える道筋を自ずと教えてくれる素晴らしい本である。

この小説は、――心の声を聞いてごらん。そして声が聞こえたら、立ちあがって、おまえの心のおもむくままに行くがいい。――という言葉で終っている。

もう一冊は、『海からの贈りもの』（アン・モロウ・リンドバーグ著、落合恵子訳、立風書房）である。これは、夫婦の関係の深まりの歴史を海にある貝にたとえて物語っている。中年期以降の夫婦の、長い時間をかけて成長を重ねていかないかぎり得られない、「ひとりの人間と、別なひとりの人間の関係」「ふたつの孤独が触れ合う関係」を実現させていくことが「家族の再生」にかかっているということを見せてくれる。

私自身、現場の保育者として、又、一つの家族を担うものとして、「家族の再生」を目ざして、今一度自分自身を見つめ直すことから始めて、自分のできることを直実にしていきたいと深く考えさせられた本たちである。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）